

検索を科学する

塩田 紳二

第6回 Google デスクトップ 2

現在ベータテストが行われている Google デスクトップは、Google デスクトップ検索のバージョン 2 という位置付けである。名称からは検索が取れて、Google デスクトップ 2 となっている。そして、単なる検索ツールを越えて、インターネット情報を利用するためのデスクトップツールに進化している。

検索ツールからデスクトップアクセサリーへ

Google デスクトップ検索の特徴的な機能に、サイドバーと呼ばれる機能がある(図1)。これは、ウィンドウの右端に置かれ、サイドバープラグインと呼ばれる小さなプログラムが表示される。これらのプラグインは、縦方向に領域を共有しており、たたんでタイトルのみ表示、あるいは広げて大きな表示とすることも可能。また、横方向はマウスで設定できる。

ここに置かれるプログラムには、RSSの表示やGmail、Google Newsなどの情報表示やCPUの負荷表示、ToDoリストなどがある。また、Googleのサイトから追加のプラグイン(図2)をダウンロードしてインストールすることもできる。多くのプラグインは、Googleの機能を使っているとはいえ、ここまでくると立派なデスクトップユーティリティである。また、Googleではプラグイン作成のための情報を公開しているため、ユーザーが自身で

プラグインを作ることも可能だ。

なお、このサイドバーは、表示させずに従来通りのキーワード入力用のウィンドウだけにすることも可能だ。

パーソナライズドホームをデスクトップへ

このサイドバーの機能、よく見るとGoogleが提供しているPersonalized Homeにも似た部分がある。NewsやGmailなどである。考えようによっては、Personalized Homeのデスクトップ版といえなくもない。

そもそも、このGoogleのPersonalized Homeは、かなりポータル的である。ただ、ポータルとしてはGoogleは後発だし、ブラウザを提供しているわけではないので、マイクロソフトなどに比べて不利ではある。

一番の目的は、検索などのさまざまなサービスでGoogleを利用してもらうこと。マイクロソフトもデスクトップサーチを提

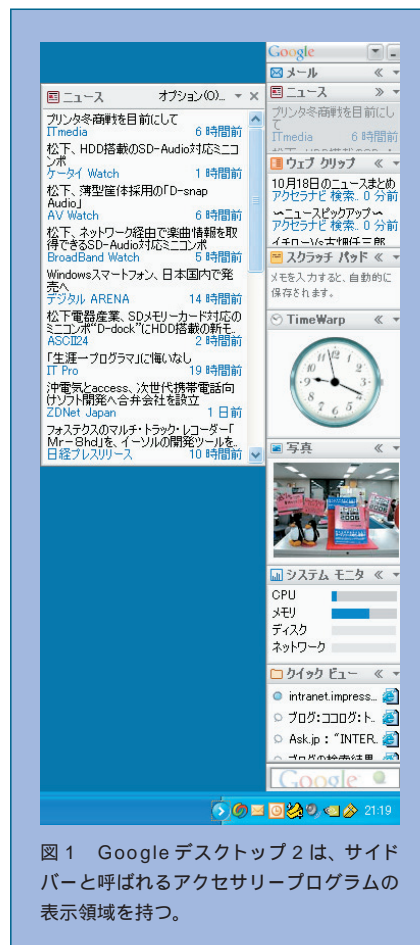


図1 Google デスクトップ 2 は、サイドバーと呼ばれるアクセサリープログラムの表示領域を持つ。

供しはじめたし、次世代の Vista では、それをより強化するようだ。とすると、Google も黙って見ているわけにはいかない。そこで Google デスクトップに付加価値を付けるとともに Google をさらに利用してもらおうというわけだ。

このサイドバー、Windows Vista にも同名の機能が搭載される予定だ(図3)。ただし、こちらは Mac OS X の Dashboard とウィジェットのように、もう少しツール的な要素が強い。

いまのところ、Google デスクトップのサイドバープラグインは、サイドバーの外に出ることはできない。

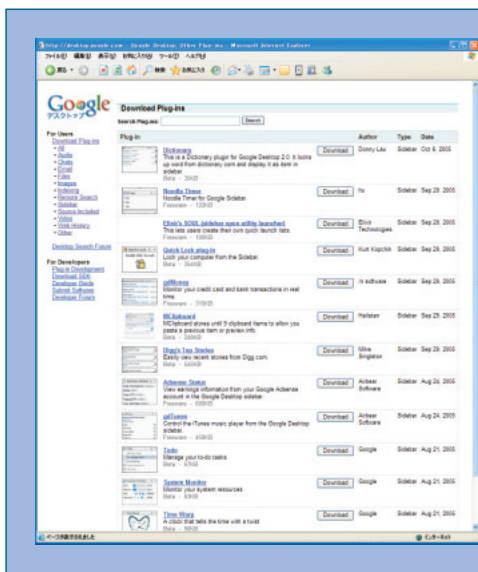


図2 Google のサイトには、サイドバーに組み込んで利用できるさまざまなプラグインが登録されている。

さらに拡張された検索機能

一見、今回の改良は、サイドバーがメインのように見えるが、実際には、検索機能やインデックス作成機能も改良されている。まず検索機能だが、検索バーでのインクリメント検索が行われるようになった。これを Google では「クイックファインド」と呼んでいる。検索キーワードを入れていくと、それに応じて、検索結果が数個表示される(図4)。ここには、デスクトップ検索の結果とウェブサーチへのリンクなどが置かれる。そこに望む結果があれば、素早く目的の文書に到達できるし、なければ、ウェブブラウザを開いて従来通りのデスクトップ検索結果が得られる。また、ここからウェブ検索以外にも Google のイメージ、グループ、ニュースなどへの検索も直接可能だ(図5)。

また、デスクトップ検索の対象は、デフォルトでハードディスク全体となり、スタートメニューやプログラムなども検索対象となる。このため、クイックファインドでは、キーワードと一致するなら、スタートメニューのプログラムなどが優先して表示される。たとえば、Word をインストールしてあれば、“wo” と入れたあたりでスタートメニューに登録されているワードがヒットする。ここは、簡単なプロ

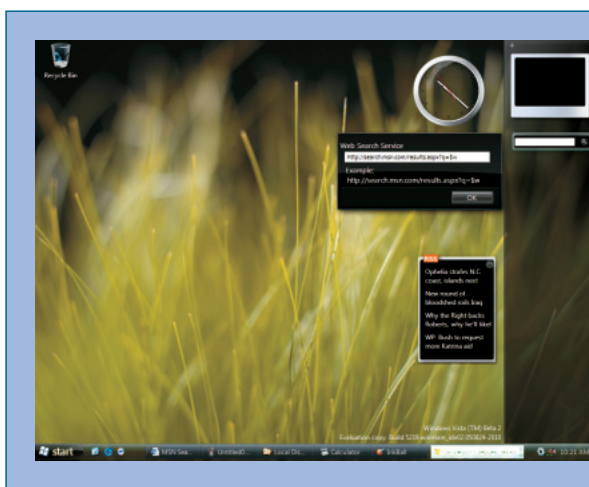


図3 次の Windows Vista にもサイドバーと呼ばれる領域があり、ここにガジェットと呼ばれるアクセサリプログラムを配置できる。

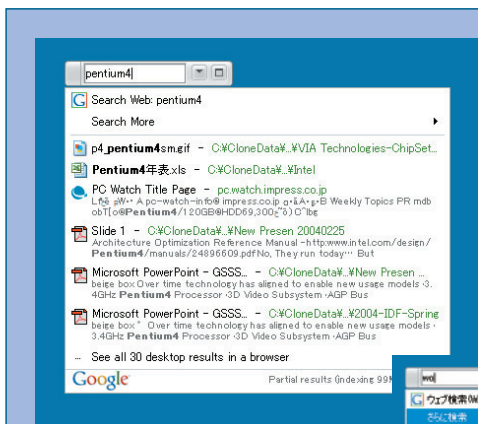


図4 サーチツールバーは、インクリメンタル検索が可能で、検索結果が小さなウィンドウに表示される。

図5 このウィンドウからイメージ検索やニュース検索へも移動できる。今回の Google デスクトップは、プログラムも検索対象になり、スタートメニュー内のプログラムを検索して起動させることもできる。



グラムラウンチャーとしても利用可能なわけだ。

ウィンドウは、上下方向には大きくできないが、左右方向には拡大縮小が可能だ。

前述のようにデスクトップ検索の対象は、デフォルトでハードディスクすべてになった。これは、従来のデスクトップサーチよりも、インデックス化する対象が広がったからである。単にいろいろなファイルに対応しただけでなく、Outlook内の予定やコンタクトなどにも対応しており、以前よりも、インデックス化できる情報の種類が増えた。もともと、ファイルに対しては、プラグインでインデックス化の対象にできた。しかし、これは、あくまでもテキストサーチやメールとして扱うものだった。また、1つのファイルの中に複数の情報があつたとしても、ファイルとしての検索は可能だったものの、中を個別の情報として扱うことができなかった。

もう1つ、今回追加された機能にOutlook用の「Outlook ツールバー」がある。これは、メール検索を直接行う機能。このツールバーの検索は電子メール(必ずしもOutlookのものだけに限らない)のみになるが、専用のウィンドウが開いて、

結果が表示される(図6)。

このウィンドウの表示は、From、Subject、Dateの3つのカラムからなるが、各カラムをクリックして選んだのちに、文字キーを押すと、その文字を先頭に持つ項目へジャンプできる。たとえば、Fromのカラムをクリックすると、検索結果はFromでソートされる。ここでたとえば“s”キーを押すとsで始まるFromフィールドを持つメッセージへと移動する。メール検索だけに機能を絞ってあるが、これはそれなりに便利。特にOutlookに大量にメッセージをため込んでいる人には便利かもしれない。

時間軸から見る

また、デスクトップサーチをウェブブラウザから行うときや、結果をウェブブラウザで表示させたとき、「タイムライン」というオプションが表示される。これは、インデックス対象となった情報やウェブの閲覧を時間順にならべて表示させるもの(図7)。

ウェブの閲覧履歴であれば、インターネットエクスプローラーでもできるが、この機能は、電子メールやファイル(作成

日)チャット記録も同時に時間順に見ることができる。

我々の記憶には、時間の前後関係だけが残っていることがある。どこかのウェブページを見たのは、のページの後だったとか、その前にファイルを編集したとかである。このデスクトップサーチの時間順の表示は、こうした手がかりからの「検索」も可能になる。実際に使ってみると、もう少しという感じもある。たとえば、現在、Googleのウェブ検索では、Gmailアカウントを使って履歴保存が可能だが、これとは別になっている。Googleと検索して開いたサイトはウェブページ閲覧の履歴として残るが、ここに検索履歴も取り入れてほしい。

また、ファイルは作成時間(コピーしたときや新規に作成したとき)が記録して残るが、修正日時も記録してほしいし、同時にOutlookの予定なども入れてほしいところだ。

テキストサーチだけではもう済まない

以前解説したWindowsのIndex Serviceでは、ファイル内のテキストと別にア

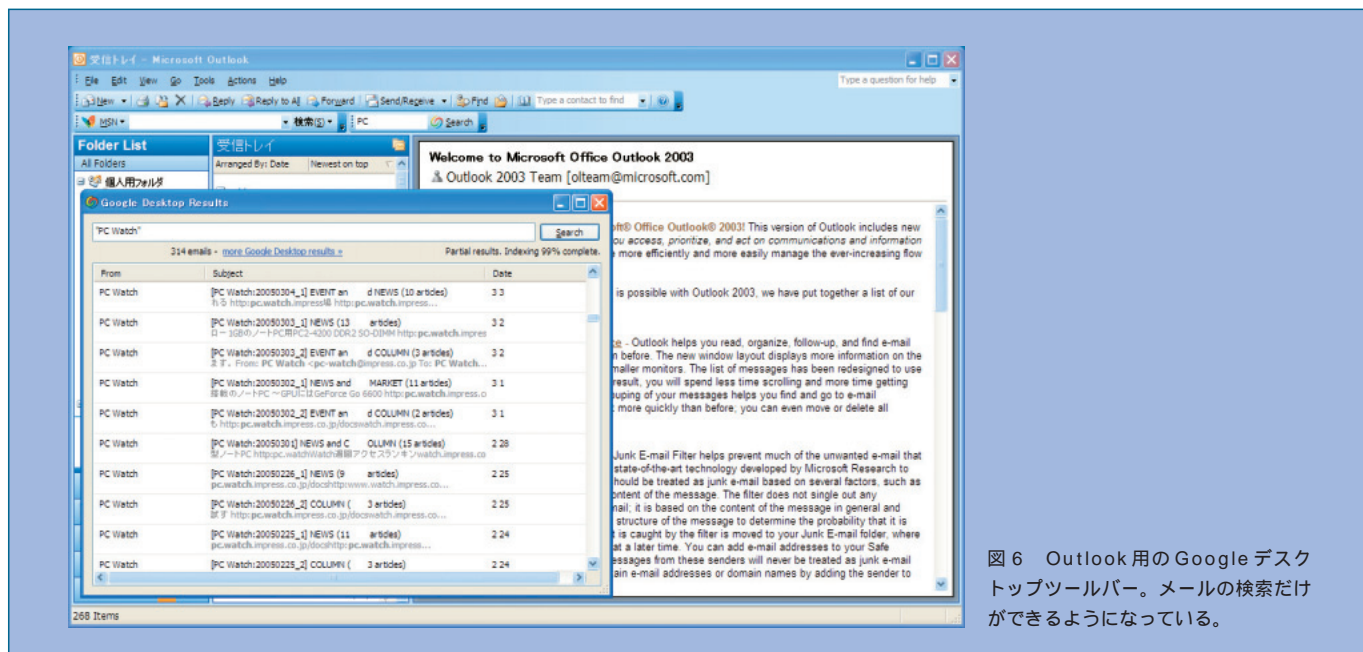


図6 Outlook用のGoogleデスクトップツールバー。メールの検索だけができるようになっている。

トリビュートと呼ばれる情報もインデックス化できる。これはたとえば、ファイルの更新日付やOutlookが持つ予定やコンタクトなどが該当する。これらの情報はファイルに関連付けられてはいるものの、検索結果としてファイル名だけが得られてもどうしようもない。

電子メールソフトでは、メッセージをファイルに複数入れて管理することが多い。このとき、検索結果としては、メッセージが格納されているファイル名ではなく、個々のメッセージが検索結果として得られなければあまり意味がない。これらは情報の格納形式としてはファイルかもしれないが、情報としてはファイルではない形である。これに対して文書ファイルや表計算のファイルは、ファイル1つがひとまとまりの情報に対応しているため、検索結果としてファイル名が得られればよく、あとは、該当アプリケーションの検索機能でなんとかなる。

予定やコンタクトも同じように個々の情報が独立している。パソコンが扱う情報には、このような非ファイル形式の情報が少なくない。

Google デスクトップ2の機能拡張はここを狙ったものだが、SDKの資料を見る限り、どのような情報を扱えるかはGoogle デスクトップ側で決めてあり、任意の形式の情報を検索対象とはできないようだ。

実は、こうした情報の扱いを広範囲にシステム側で行おうとしたのが、次期WindowsであるVista(開発コード名Longhorn)に搭載される予定だったWinFSなのである。WinFSは簡単にいうと、SQLサーバーのエンジンと、システムが定義する電子メールやコンタクトのスキーマ定義からなる。このスキーマ定義は、ユーザー側アプリケーションでフィールドの追加などが可能で、オリジナルのレコードはそのままに、フィールドを追加したデータベースをアプリケーションが独自に利用できるようになっていた。



図7 デスクトップ検索結果をウェブブラウザに表示したとき、ファイルやメール、ウェブの閲覧履歴を時間順に見る「タイムライン」表示機能が利用できる。

また、こうして定義された機能を使うことで、アプリケーションと扱う情報は分離され、複数アプリケーションが同じ情報を、ファイルフォーマットを理解することなく共有することが可能になるはずだった。

これを利用することで、Vistaではさらにデジカメ写真のExifやMP3のID3タグなどもデータベース化しようとしていたのである。

しかし、VistaへのWinFSの搭載が断念され、それは、現在のIndex Serviceを強化したものに置き換えられた。このため、検索機能やそれを使ったファイルのブラウズなどは残ったものの、情報をアプリケーションで共有する機能はお預け(Vistaの製品版出荷後にWinFSを導入するアップデートが予定されている)となってしまった。

このために、Vistaでは、こうした機能のパフォーマンスが落ちることになった。というのは、Indexサービスは、あくまでもファイルの中身を読んでインデックスを構築するものであるため、最新状態でファイルをブラウズさせるためには、どう

してもそのたびにファイルの更新を確認して、読み込む必要があるからである。

これに対してWinFSは、自身がデータベースであるため、データは自分で管理しており、インデックスの更新はデータが更新されたタイミングで行える。

将来的にWinFSが導入されることを考えると、Google デスクトップがどのように進歩していくのかは非常に興味があるところだ。サイドバーなんてアプリケーション方面への展開もこれを考えてのこともかもしれない。

マイクロソフトがインターネット検索に力を入れ、Googleがデスクトップ検索を強化するといった状況であり、また、ニュースなどでも、両社の対決姿勢を報道するものが少なくない。

しかし、かつて、ウェブブラウザやJavaでもそうだったように、こうした対決が激しくなるほど、製品の進歩も早くなり、より高度な機能が提供されるようになる。その点では、Google デスクトップの今後が楽しみでもある。



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp